

# 教材研究と教材の扱い方(13)

一

小川国夫の「物と心」の教材研究と教材の扱い方について考えたい。短編ではあるが、叙述が丁寧になされた独特な作品といってよい。小川国夫の作品は、この種のもものが多く、そこに彼の独自の文学世界があるように思う。扱いにはかなり苦勞が強いられそうである。

話の内容は、宗一と浩という兄弟が「駅の貨物積みのホームへ行き、鉄のスクラップ」を拾ってきて、二人して研いだという、ただそれだけの話である。表面だけを読めば、作者のメッセージは何だろうと考えさせられるほどの作品であるが、丁寧に読んでいくと、作品に込められた多様で掘みにくいメッセージが見えてくる。短い作品なので、全文を掲げることにする。

菅原敬三

## 物と心

小川国夫

兄の宗一といっしょに、浩は駅の貨物積みのホームへ行き、鉄のスクラップの山をあさって、一本ずつ古い小刀を拾った。二本ともさびきつていたので、家へもどって二人は砥石を並べて我を忘れてといた。ときどき刃に水をかけて指でぬぐい、とげたぐあいを見るのが楽しみだった。浩の小刀はよく光り、刃先へ向かって傾斜している面には、くちびるが映った。宗一の小刀は、その面の縁だけが環状に光っていて、中央にさびたままの、くぼんだ部分を残していた。

浩は、自分は丸刃にしてしまったが、兄さんは平らにといた、と思った。浩は自分が時間を浪費して、しかも、取り返しがつかないことをしてしまったように思い、周到だった兄をうらやんだ。浩は心の動揺を隠そうとして、黙って

また砥石に向かった。横にいる宗一が意識されてならなかった。彼が横にいただけで浩は牽制されてしまい、自然に負けていくように思えた。しかし浩は並んでいいだ。宗一がどんなふうにとぐか気になったからだ。宗一はやっていることにふけていた。浩は自分もふけているように見せかけた。浩には時間が長く感じられた。自分が人をこんな思いにさせることがあるのだろうか、と彼は思った。

浩は自分の小刀でてのひらを切つて、宗一に見せるようにした。宗一はそれに気づき、目を上げて浩を見た。浩は自分から宗一の視線の前へ出ていった気がした。宗一をだました自信はなかった。宗一はといていた小刀を浩に差し出して、

——これをやらあ、と言った。そして今まで浩がといていた小刀を、とぎ始めた。

——けがはどうしつか、と浩はきいた。彼はもう嘘の後始末の仕方を、宗一に求めている気持ちになっていた。

——けがか、ポンプで洗つて、手ぬぐいでおさえていよ、と宗一は言った。

——……。——おまえんのも切れるようにしてやるんで、痛くても我慢して待っていよ。

浩はポンプを片手で押して、傷に水をかけた。血は次から次へと出てきて、水に混じってコンクリートのわくの中

へ落ち、彼に魚屋の流し場を思わせた。彼はその流れぐあいを見て、これがぼくの気持ちだ、どうしたら兄さんのようにひきしまった気持ちになれるだろう、と思った。宗一は巧みに力をこめてといていた。浩はその砥石が、規則正しく前後に揺れているのを見守っていた。すべてが宗一に調子を合わせて進んでいた。

## 一一

読んで分かるように、浩の心情は克明に表現されている。本文を最初から読んでいって、課題になるような所、つまり書かれていない浩の心情を探るといふ程度の授業では、授業として成立しない。教師泣かせの教材といつてよいが、こういう時には、表現を丁寧に読むことが重要であり、その上で学習課題を設定することが必要となる。

本文の叙述に沿って、検討すべき所を洗っていききたい。まず、「兄の宗一といっしょに、浩は駅の貨車積みのホームへ行き」という部分に検討すべきことがある。なぜ二人が「駅の貨車積みのホーム」に行つたかということである。子供の意識が「駅の貨物積みのホーム」に向く理由は何かということであるが、それは「駅の貨車積みのホーム」に行けば、子供にとって宝物のように心を引きつけるものが、

そこにはあるということであり、それを子供は知っていたのである。ホームへの出入りに対しては当然制約があるとはいうものの、ある程度子供が自由に出入りのできる場所であったことも、彼らは知っていたのである。第二次世界大戦後間もない、ある意味ではおおらかさのあった時代であることを伺わせている。

「駅の貨車積みのホーム」が子供にとって宝の山であったことは、「鉄のスクラップの山をあさって、一本ずつ古い小刀を拾った」という部分からでも分かる。「鉄のスクラップの山をあさって」の部分に注目すると、工場や家庭から出された古鉄が、特別の場所ではなく「貨車積みのホーム」に何気なく積まれているのだが、そこからは何が出てくるか分からない。大人にとって何の価値もないものが、子供にとってはちよつとした掘り出し物として捜し出せる場所である。「スクラップの山をあさって」からは、彼らの価値観に見合うものを時間をかけて見つけ出そうとした努力が読み取れる。そして、「一本ずつ古い小刀を拾った」のは、「山をあさった」成果である。一本ではなく、二人で「一本ずつ」とは彼らにとって、嬉しい成果である。互いが自分で捜し出した獲物に納得して、にっこり笑った姿さえ想像させる。「二本ともさびきっていた」にもかかわらず、かれらは研げばさびの奥から光輝く小刀が現れることを知っていたのである。

本文は四段落から成っているのだが、意味（意味内容）に注目すれば、冒頭の一文と後の部分との二つに分けるのが、読解作業としては自然である。場所が冒頭の一文は「駅」であり、それ以降は「家（自宅）」である。それぞれで解明する課題を設けるならば、ここで前半と後半を分けるのが分かりやすい。

「二本ともさびきっていたので、家へもどって、二人は砥石を並べて我を忘れてといだ。ときどき刃に水をかけて指でぬぐい、とげたぐあいを見るのが楽しみだった。」の「二人は砥石を並べて我を忘れてといだ」の部分からは、喜びに浸って一心不乱に小刀を研ぐ二人の姿がある。成果は時間をかけて自分の作業に没頭すれば得られるのである。それは「ときどき刃に水をかけて指でぬぐい、とげたぐあいを見るのが楽しみだった」の部分に物語られている。そして、成果は、「浩の小刀はよく光り、刃先へ向かって傾斜している面には、くちびるが映った。宗一の小刀は、その面の縁だけが環状に光っていて、中央にさびたままの、くぼんだ部分を残していた」という形で現れた。

ここで注意しなければならぬのは、宗一と浩の呼称や動作主の問題である。冒頭から「とげたぐあいを見るのが楽しみであった」の部分までは、宗一と浩は「いっしょに」行動し、「二人は」（我を忘れてといだ）であり、主語の省略された「ときどき刃に水をかけて指でぬぐい、とげた

ぐあいを見るのが楽しみだった」の部分の主語も「二人は」である。ここまでは、二人は行動を共にし、喜びを共有している。

しかし、これ以後、二人の呼称は「浩」、「宗一」となり、「二人は」と表現されることはない。小説の展開としては、ここで大きな転機を迎えたのである。以後、浩の宗一に対する意識が中心に述べられ、宗一と対比した叙述が効果的に働いてくる。そして、「浩は」「宗一は」の係助詞「は」の多用にも「とりたて」の効果が狙われている。

第一段は、「浩の小刀はよく光り、刃先へ向かって傾斜している面には、くちびるが映った。宗一の小刀は、その面の縁だけが環状に光っていて、中央にさびたままの、くぼんだ部分を残していた」と、二人の作業の結果が対比的に述べられて終わる。もし、仮にこの部分で小説が終わるとすれば、二人はそれぞれ自分の作業に満足し、それぞれの喜びを味わって「めでたし、めでたし」で終わるはずである。第一段では、二人の作業の結果だけが示されて終わる。

\*

事件は、浩が宗一の磨いた小刀を目にした瞬間から起こった。小説の展開上、この個所の把握は重大であり、学習者に発見させなければならぬ課題である。

第二段以降、浩の心理が詳述される。宗一の小刀を目にした浩の価値観が大きく揺さぶられることになる。それは、

突然に、そして決定的な意味をもってやってきた。

「浩は、自分は丸刃にしてみました、兄さんは平らにといだ、と思った」。つまり、錆びた小刀を研ぐという意味の受け取り方が、宗一と浩では決定的に違っていたのである。宗一の磨いた小刀を目にするまでは、浩にはそのことの意味が分かっていない。錆びた小刀を磨く前の二人には、それぞれ研いだ後のイメージがあったはずである。そのイメージを追って、二人は作業をする。宗一は切れる小刀を目指して、浩は見た目の美しさを求めて錆びた小刀を研いだということである。錆びた小刀を研ぐということに対する認識の甘さを、浩は思い知ることになる。「浩は自分が時間を浪費して、しかも、取り返しがつかないことをしてしまったように思い、周到だった兄をうらやんだ」。浩の磨いた「小刀はよく光り、刃先へ向かって傾斜している面には、くちびるが映」るほどに磨き上がった。それにもかかわらず、浩の心には敗北感が占めている。宗一の小刀を目にした浩は初めて、「刃を研ぐ」とはどうすることが認識できた。よく切れてこそ小刀なのである。そこが最初から目の行く宗一は「周到」な兄であり、自分は本質の見えない「取り返しがつかない」失敗をよくする人間なのだという、決定的な認識を持たされることになった。

ここが重要なところだが、この小説の主題ないしは作者のメッセージ、問題提起と言ってもいいのだが、それは

「兄弟認識」または「周到で優秀な人間と失敗の多い劣等な自分」「何をやっても追いつかない相手に対する認識」にあると言っているのではないかと思う。結論的に言えば、万事につけ浩は宗一に追いつけないのであり、人間の違いを決定的に思い知らされる存在として出てくる。宗一は自分の作業を誇る訳でもなく、失敗した浩を迎え容れる度量の大きさも持ち合わせている。しかも、それが自然なのである。「一緒に居るだけで息の詰まるほどの圧迫感を感じずる人間がいるのだ」、そして「何をしても敵わない、そういう人間が世の中には居るのだ」とでも作者が言いたいように思える。

「心の動揺を隠そうとして」浩は、自分の名譽回復に虚しい努力をすることになる。「自分は丸刃にしてしまったが、兄さんは平らにといだ」と思った浩は、自分の失敗を回復するために、兄に倣って「平らに」研ごうと努力ができたはずである。しかし、浩にはその選択肢を選ぶことはできなかった。それはなぜか。日頃から兄の優秀さを見せつけられていたからであろう。自分に対してマイナスの評価を出さざるをえない浩の苦しい気持ちを読み取れる。

「浩は心の動揺を隠そうとして、黙ってまた砥石に向かった。横にいる宗一が意識されてならなかった。彼が横にいてだけで浩は牽制されてしまい、自然に負けていくように思えた」。浩の苦しい努力が書かれている。しかし、彼の

思いは、小刀を研ぐことよりも、宗一の仕事ぶりの方に向けられている。「浩は並んどいだ。宗一がどんなふうにとぐか気になったからだ」。しかし、「宗一はやっていることにふけていた」。宗一にとっては、複雑に揺れ動く浩の気持ちを推し量るよりも、小刀をより鋭利に研ぐことの方に気持ちが向けられている。それが自分の仕事だからである。浩の気持ちを無視したという訳ではない。浩が速く見事に研ぎ上げようと、それは問題ではなく、自分の小刀を小刀として研ぎ上げることの方が大切なのである。今のままでは不十分だからこそ、宗一は「やっていることにふけていた」のである。しかし、浩は違う。浩は宗一の成果を見てしまったのだ。浩の欲しいのは自分の作業に対する宗一の高い評価であり、褒め言葉である。だからこそ「浩は自分もふけているように見せかけた」のである。兄と同じように作業することが、兄に追いつくことになるのだが、混乱した浩にはそれができない。「ふけているように見せかけた」から、「浩には時間が長く感じられた」のである。

繰り返しになるが、宗一の研いだ小刀を目にした後の浩の気持ちが見せられている。その箇所を抜き出してみよう。

・「自分は丸刃にしてしまったが」

・「時間を浪費して、しかも、取り返しがつかないようなことをしてしまったように思い、周到だった兄を

うらやんだ」

・「心の動揺を隠そうとして、黙ってまた砥石に向かった。彼が横にいるだけで浩は牽制されてしまい自然と負けていくように感じた」

・「自分もふけっっているように見せかけた」

浩の落胆、後悔、敗北感が読み取れる。そのまとめとして、浩は「自分が人をこんな思いにさせることがあるだろうか」と思ったのである。ここまでが、第二段。

第三段は、段落の展開から言えば、起承転結の転に当たる。宗一から受けた圧迫感から解放されるために、浩は策を労することになる。

「浩は自分の小刀でてのひらを切って、宗一に見せるようにした」のが、それである。浩は自分の研いだ小刀が、よく切れることの証明としてうっかり「てのひら」を切ったように見せかけようとしたのかもしれない。そこは判然としないが、その行動は浩の意図とは逆に、浩をいよいよ追い詰めることになる。宗一は動じないのである。ここでも浩は宗一の人間の大きさを認識させられることになる。

「浩は自分から宗一の視線の前へ出ていった気がした」のにもかかわらず、「宗一をだました自信は」沸いてこない。次いで、宗一の行動に浩は自分の策の虚しさを味わうことになる。

「宗一はといていた小刀を浩に差し出して、

——これをやらあ、と言った。そして今まで浩のといでいた小刀を、とぎ始めた」のである。宗一は自分の研いでいた小刀を惜しげもなく浩に与え、浩の丸刃にといだ小刀を研ぎはじめた。宗一からは、丸刃に研いだ浩に対して責めの言葉は何も出てこない。責めないという宗一の行動はきちんと押さええておく必要がある。宗一は浩の研いだ小刀が不完全であることを見抜いて、浩の小刀を研ぎはじめた。それは丸刃で、怪我をしても大したことはないと思抜いていたのかもしれない。

しかし、それは浩にとって何の解決にもならない。浩の望んでいたのは、宗一が浩の方を向いてくれ、怪我の後始末をしてくれるのではなかったか。だからこそ

「——けがはどうしつか、と浩はきいた。彼はもう嘘の後始末の仕方を、宗一に求めている気持ちになつていた」  
のである。

「——けがか、ポンプで洗って、手ぬぐいでおさえていよ、と宗一は言った。」

宗一の指示はあくまで適切である。浩は返す言葉もなく「——……。」黙っている。

「——おまえんのも切れるようにしてやるんで、痛くても我慢して待っていよ。」

宗一の意識は、飽くまでも切れる小刀に向けられている。

目的に対して一途に努力する宗一の姿が浮かび上がる。ここまでが、第三段。

第四段は、浩と宗一の違いが一層明確になる。浩の心理描写と宗一の行動描写が対比的に述べられる。

「浩はポンプを片手で押して、傷に水をかけた。血は次から次へと出てきて、水に混じってコンクリートのわくの中へ落ち、彼に魚屋の流し場を思わせた。彼はその流れぐあいを見て、これがぼくの気持ちだ」

ここに述べられた浩の心理は、この事件の収束の役割を持つ。「これがぼくの気持ちだ」とは、どういう気持ちだろうか。続いて「どうしたら兄さんのようにひきしまった気持ちになれるだろう、と思った」という叙述があるが、そこから類推すると「ひきしまった」とは逆の「締まりのない」気持ちと受け取れなくもない。しかし、目的意識を明確に持たない、集中力の薄い精神構造に属するぐらいの意味合いと受け取りたいところである。ここはかなりの幅を持った解釈が許されるであろう。弟にとって兄とはどういう存在かなどの兄弟認識を含めて、学習者の解釈を最大限尊重した扱いを心掛けたい。

宗一は、目的意識と集中力、加えて技術を持って行動している。

「宗一は巧みに力をこめてとんでいた。浩はその砥石が、規則正しく前後に揺れているのを見守って

いた。」

宗一のように「規則正しく前後に」研ぐ技能を、浩は持ち合わせていない。「ものの方や技能」に対しての浩の学習が、宗一の行動を見守ることを通して始まるのである。

その場の雰囲気を含括するような一文で、この小説は終わる。

「すべてが宗一に調子を合わせて進んでいた。」

ここで確認しておきたいことは、宗一は一貫して変わらない姿を持っていることである。それに対して、浩の心境は揺れに揺れ動いている。宗一の価値観、態度、行動ならびに浩の揺れる心理と物事や人物に対する認識を、しっかりと押さえた授業を試みたい。

さて、最後になるがタイトルについて考えておきたい。「物と心」、この凝縮された言葉はどのように解釈すればいいのだろうか。すべての意味合いを表現した文にすると、どのようなものになるのだろうか。凝縮されているからこそ多様な解釈が許されるのであるが、「物に表れたその人の心」、「その人の心は、その人が関与した物に表れるのだ」、「物と心とは密接につながっている」などの解釈が可能のように思う。読者それぞれに解釈する楽しさを、このタイトルは含んでいる。

以上の教材研究を踏まえて、授業展開を考えてみたい。  
 本文は四つの段落から構成されているが、各段落に述べられている浩の心理に注目した展開が考えられる。堅実でオーソドックスな授業展開ではあるが、本文の「意味」に注目すると別な展開が考えられる。「意味」(ここでは「場所」)に注目して本文を二つに分けると、冒頭の一文とそれ以降の文章の二つに分けられる。前半の場所は、「駅の貨物積みのホーム」であり、後半の場所は「家」である。それぞれの場所で追求すべき課題があり、その課題に注目すると、各段落毎の浩の心理がより深く追求できる。

板書案を先に示すことにする。

物と心

小川国夫

〔駅の貨物積みのホーム〕

宗一(兄) 鉄のスクラップの山をあさって

浩(弟) 一本ずつ小刀を拾った。

なぜ「駅の貨物積みのホーム」に行ったか

(子供にとって「駅の貨物積みのホーム」は「宝

の山」に近いイメージがある)

・金目のものがある。

・子供にとって興味をそそるものがある。(「あ

さって)

なぜ「古い小刀」を拾ったか

・磨けばものになると思った。

〔家〕 ←

(小刀は)二本ともさびきつっていたので、二人は砥石を並べてといた。

A 二人に共通した態度 研ぐ時の心構え・気持ち

二人は砥石を並べて我を忘れてといた(「熱中ぶり」)

とげたぐあいを見るのが楽しみだった。

B 二人の違い

第一段(我を忘れてといた)

その面の縁だけが環状に光っていて、中央にさ

びたままの、

くぼんだ部分を残していた。

第二〜四段

(刃を)平らにといた(宗一の周到ぶり)(第

二段)

やっていることにふけていた(第二段)



浩のといでいた小刀を、とき始めた(第三段)  
巧みに力をこめてといでいた(第四段)

どうしてこういう態度がとれるか、

・ 目的意識がしっかり持てるから

・ 集中力があるから

・ 忍耐強さがあるから 等等

浩を責めない・浩のといだ小刀を評価しない宗一

—— 宗一の人間性

・ 人間の大きさ

小刀をとぐ

第一段 (我を忘れてといだ)

見る前足  
よく光り、刃先に向かって傾斜している面には、

くちびるが映った

宗一の小刀を見た時

第二段

・ 自分は丸刃にといでしまった

・ 心の動揺を隠そうとして黙って

また砥石に向かった

・ (とぐことに) ふけているように見せ

かけた

後望  
自分が人をこんな思いにさせることがあるだろ

見た羨  
うか、と思った

(宗一に対する羨望)

第三段 (打開策 —— 策略)

・ 自分の小刀でてのひらを切って、宗一に

見せるようにした。

・ 「けがはどうしつか、もう嘘の後

始末の仕方を宗一にもとめいる気持ち

になっっていた。」

・ 「……。」

策略  
みじめさ

第四段

・ ポンプを片手で押して、傷に水をかけた。

・ コンクリートのわくの中へ流れ落ちる血

これがほくの気持ちだ

虚しさ

どうしたら兄さんのようにひきしまった気持ち

になれるだろう

タイトル(「物と心」)の意味するもの

・  
・  
・

学習者にとって、学習の喜びは「発見と解決」にあると言つてよい。学習課題として何が用意できるか、教師は十分な教材研究をしなければならない。

全体的には、場所に注目させ前半と後半の二つから構成されていることをとらえさせたい。前半には「駅の貨物積みみのホーム」に注目させ、「なぜ、そこが子供の興味を引くのか」「なぜ『駅の貨車積みみのホーム』に行ったか」、「手が汚れるのかもかわらず、何を求めて鉄のスクラップを『あさった』のか」、「なぜ『古い小刀』を拾ったのか、それは拾う価値のあるものか」などが学習課題となろう。また、大きく「駅の貨車積みみのホーム」に行き、鉄のスクラップの山をあさった成果はあったか。あったとすれば、どういふ点が成果と言えるのか」などと問い、学習者から出てきた答えを整理するのもよい。

「家」に帰ってからの課題は、小刀を研ぐ時の「二人に共通した態度は何か」、また、それと対比して「二人の違いはどういう所に伺えるか」を明らかにすることであろう。そして、「機嫌良く小刀を研いでいた浩を大きく揺さぶった事件は何か」、または「小刀を研いでいた浩の気持ちだが、大きく変化することになるが、何がきっかけとなったか。そのきっかけの前と後とでは、浩の気持ちはどのように変化したか」が大きな課題となる。

小さな点は板書計画に示したが、学習者を能動的に授業

に参加させるためには、学習者自身が自分で取り組める課題が必要となる。課題の前には、教師も学習者も対等であり、課題を学習者と共に解決する心構えが教師の側にも必要であろう。そして、何が課題となるか、その課題がどのように関係するか、そこにどのように段落がからむか、板書の構造化を心掛けたい。

以上、「物と心」の「教材研究と教材の扱い方」のあらましを述べたが、紙幅の関係で具体的な授業展開は別の機会に譲りたい。

(すがわら けいぞう 本学教授)